

言の波

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

戦争と平和

本島 等

(長崎教区信徒)

日本が中国と戦争をしているころ、私は五島の仲知小学校に通っていた。1年生と2年生は同じクラスで、一人の先生の受け持ちだった。遠い山道と一緒に通ったのは12、3人だった。戦争が終わって帰ってみたら、生き残っていたのは私を含めて二人だけだった。

戦争は15年も続いた。私が久留米の軍隊に入隊したときには兵隊を運ぶ船もなく、私が行くようになっていたビルマには行けなかった。私は熊本陸軍教育隊で見習士官になり、そのまま残されて教官になった。沖繩を占領したアメリカ軍が昭和20年11月頃には九州南方に上陸するだろうと予想し、それを迎え撃つために、私は、小隊長になり、山砲一門を率いて鹿児島シブシ湾の歩兵部隊の後ろで援護することになった。

いた。しかし、8月15日戦争が終わった。私は救われた。

その2年前、私は夜間の学校に通っていた。ある朝ラジオが勇ましく日本の真珠湾攻撃を報じた。日本中が万歳をして喜んだ。真珠湾でアメリカの軍艦を沈めるために使った「魚雷」(魚型爆弾)は、ほとんどが長崎で造ったものだったと言われている。

8月9日の原爆は、浦上カトリック信徒の8千5百人の命を奪った。長崎市全体の被爆死者は、その年の年末までに7万人余りだったと言われる。被爆したのは、日本人のほか中国人、朝鮮人、台湾人、イギリス人、オランダ人、アメリカ人、オーストラリア人だった。日本人は、戦争の15年間、アジア、太平洋の国々を侵略し、オランダ、

イギリスなどを含めて1千万人以上を虐殺し、財産を略奪、女性を強姦するなど、ほしいままにした。

あの戦争で、日本人の死者は310万人であった。内訳は、国内で80万人、国外で230万人である。国内では、東京大空襲の10万人、沖縄戦の20万人、広島、長崎の被爆死20万人などで、国外の死者230万人のうち、150万人は飢餓か栄養失調死であった。

また、昭和18年5月29日、アッツ島の守備隊2千527名は傷病者を処分し、電文を大本営に送った後、全員が敵陣地に突入・玉砕した。タラフ島の4千455名、クゼリン環礁の7千340名、サイパン島の4万1千244名、グアム島の1万8千560名も、すべて玉砕だった。また、東京、横浜、名古屋、大阪、神戸など60余の都市が空襲を受け、破壊された。最後に、原爆が広島、長崎に投下されて、戦争は終わった。日本はポツダム宣言を受諾した。

思うに、原爆投下は晴天の霹靂(突然のけしき)な雷だ。理由がなかった。敗戦の日に過去の罪業をすべて切り捨てた日本人は、平和の使徒となつて日本人の被害だけをうんぬんする。それは誤りである。

昨年9月11日、アメリカ・ニューヨークの世界貿易センターに2機の飛行機が激突、3千人余の人命を奪った。この同時多発テロはアメリカ人にとつて、真珠湾奇襲攻撃以来の衝撃だったようだ。ルーズベルトは日本人の騙し討ちの日を「屈辱の日」と言い、日本人を詐欺師と呼んだ。日本軍の「玉砕」「特攻」などで、日本の戦争は憎悪の極みの戦争となった。戦争でも国家間の基本的な点での「信頼」が大切であることが分かる。

われわれは、21世紀は平和の世紀になるものと思っていた。しかしアメリカの同時多発テロが起きて、期待は裏切られた。しかし、未来に向けての大きな希望がある。それは、全世界の戦争反対の声である。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、「今日ラクで起きている戦争が人類の行く末を脅かしている時、私たちに緊急に求められているのは、断固として、平和だけがより公正で思いやりのある社会を建設する道である、と宣言することです」と訴えた。

去る3月30日に、宣教委員会・正義と平和推進部会主催の「平和問題」に関する講演会が催された。長崎のカトリックにもこのような社会に向けての動きが始まりつつあることに、深い感慨をおぼえている。

A. 教皇ヨハネ・パウロ二世は1981年2月25日、広島平和アピールの中で、「戦争は人間の仕業です」と宣言されました。戦争は断じて神さまの仕業ではないのです。

人間は「正義」をかざして自分が正しいことを主張しますが、それはしばしば自分だけの正義である場合が多いものです。そして、他の者の正義を断罪しはじめます。そして始末の悪いことに、その裏付けとして「神」を持ち出してきて、「聖戦」を叫ぶようになります。戦争はあくまでも人間の仕業である、ことを確認すべきです。

教会は確かに、正義の戦争があり得ることを理論上は認めています(現代世界憲章79)。しかし、現実には戦争は人殺しではない、ことも明示しています。

Q. 戦争が頻発する現代の世界状況を考えると、平和推進行動についても空しさを感じるのですが、どうしたらよいのでしょうか。

A. 声高に「反戦」を叫ぶことも大事です。と同時に、自分の身の回りに平和を築くことも大切です。そして現実の姿が見える視点に立つことは、さらにさらに大事なことです。

一つの平和アピールを紹介しましょう。これは、イラク戦争がはじまる直前にアメリカ

カのメイン州で開かれた反戦集会で、十三才のシャロロッテ・アルデブロンさんが読み上げた平和アピールです。世界中にインターネッットなどを通して伝えられ、感銘を呼んだものです。

知っていますか？ イラクに住む二千四百万人の人たちのうち半分以上は、十五歳以下の子どもなんです。

私はもつと十三歳ですが、もつと大きい子たちや、ずつと小さい子たちがいて、女の子も男の子もいるし、髪の毛は赤色じやなくて茶色だったりしますが、みんな私とちつとも変わらない子どもたちです。

ですから、イラク爆撃のことを考えると、きには、頭の中で私のことを思い描いてほしいのです。みなさんが戦争で殺すのは、私なんです。

もし運がよければ、私は一瞬にして死ぬでしょう。1991年2月16日にバグダッドの防空壕で、アメリカのスマート爆弾によって虐殺された三百人の子どもたちのように。

けれども、私は運悪くもつとゆつくり死ぬかも知れません。たつた今バグダッドの子ども病院の「死の病棟」にいる、十四歳

のアリ・ファイサルのように。湾岸戦争のミサイルに使われた《劣化ウラン》のせいで、あの子は不治の白血病にかかっています。

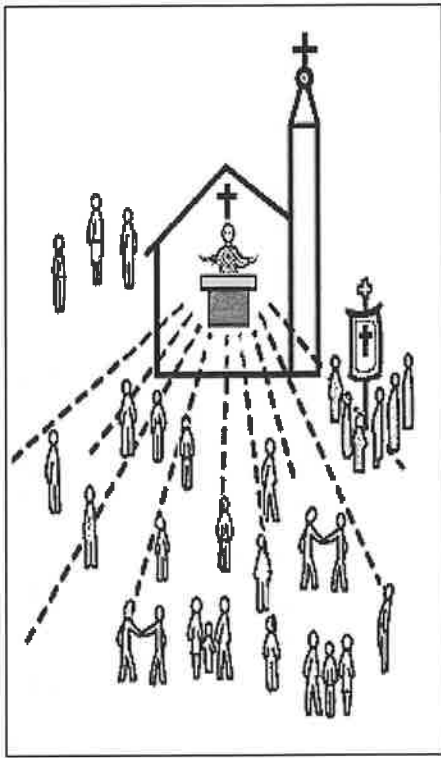
さもなければ、三歳のとき湾岸戦争でお父さんをアメリカに殺されたアリのように、私は孤児(みなしこ)になるかも知れません。

アリは三年のあいだ毎日、お父さんのお墓の土を手でかき分けては、こう呼びかけているそうです。

「だいじょうぶだよ、パパ。パパをここに入れたやつらはもつとなくなつたから」と。でもそれはちがつたみたいね、アリ。そいつらはまた攻めていくらしいもの。

皆さんの子どもや姪や甥が、こんな目に会つのを想像してみてください。体が痛くて泣き叫ぶ息子に楽になることを何もしてやれない、自分を想像してみてください。崩れた建物の瓦礫の下から娘が助けを求めて叫ぶのに、手が届かない自分を想像してみてください。

子どもたちの目の前で死んでしまい、そのあと彼らがお腹をすかせ、独りぼつちで路上をさまよつたのをあの世から見守るしかない、自分を想像してみてください。



は幸せだ、と思つています。日曜日にはミサにあずかり、聖体をいただきます。告白場へ行けば、司祭を通して罪のゆるしを受けることができます。その他の秘跡もすべて受けることができます。また、誰かに物的援助が必要であれば、それが満たされることもありま

す。信徒のこの「受身的」な態度は、旧教会法の規定に忠実に従つたものです。旧教会法では、一般信徒には、聖職者から霊的なものや罪のゆるしのための大きな手助けを受ける権利、信仰教育を受ける権利、小教区の資金を管理する権利、という3つの権利が認められていました。これ以外の権利は特に認められてはいません。この教会法は、第二バチカン公会議の精神にもとづき、1983年に全面改正されました。この新しい教会法の中には、信徒の役割が肯定的・積極的な調子で描かれています。しかし、私たち信徒の態度はいまだに「受身的」であり、心の中には旧教会法の精神が生き残っているのです。

3. 種々の会の役割

信徒の中には、もっと教会の活動のお手伝いをしたいと思つている人々もいます。信心会や種々の活動会に参加している人(旗の回りに描かれている人)たちもいます。共に祈る、一緒に聖書を勉強する、病人訪問をする、教会に来ていない人を訪ねる、貧しい人たちの活動会が活発な小教区もあります。

4. 振り返ってみれば

このタイプの小教区では、主任司祭は常に彼らの指導者であり、彼らはしばしば自分たちを主任司祭の手足だと考えています。第一のタイプの「主任司祭中心の教会」像を見ても、なぜこのような教会(小教区)になつたかについても考えてみる必要があると思ひます。

明治初期の「キリシタン発見」当時の長崎の信者たちの教育レベルは、皆無に等しい状況でした。その後、宣教師たちの涙ぐましい努力のおかげで、教育の機会に恵まれる者も少しは出てきました。したが、信者全体から見ると、ほんの一握りの人たちにすぎませんでした。

第二次大戦後も、昭和30年代までは、大部分の人が義務教育を受けるのが精一杯でした。高等教育を受けられるのはごく一部の

人でしたし、専門分野の知識はごく限られた人たちのみのものでした。その中で聖職者は、その時代の最先端で最高の教育を受けていたのです。ですから、信徒から見ると、「司祭は、神様の次に何でもできる存在」だったといえるでしょう。しかもこの状況は、長い教会の歴史の中で、延々と続いてきたものでもあるのです。

したがって、第二バチカン公会議までの小教区像とは、「主任司祭が祈り・研究し・実行し・責任をとる」という形にならざるを得なかつたし、その形ですばらしい成果を収めることもできたのです。私たちは、その理想的な姿を出津教会のドロ神父様に見ることができません。

今回みてきた「主任司祭中心の教会」像は、そのような必然的な流れの中で誕生し、成果を収めてきた、と考えてもよいのではないのでしょうか。

次回は、第二タイプの小教区像として、「活動団体中心の教会」について考えていきたいと思います。

けることが保証される程度の地球環境を作り、それを永久的に安定化させることが、取り組み可能な課題である。

この最終目標についても、また、自分たちの生活や活動が可能な限りこれ以上の地球温暖化を引き起こさないように行われねばならないこと、そして、地球温暖化防止に有用な二酸化炭素吸収能力の高い森林を増やしたり健全に経営管理するよう努めること、という基本的方策についても、皆の同意はほぼ成立している。

揃わぬ具体化の足並み

だが、具体的にどうするかという問題になると、1997年に開かれ、先進国に「温室効果ガス」の排出削減を義務つけた「京都議定書」から米国が一昨年突如離脱したことなどにも現れているように、意見は分かれ、態度もさまざまで、足並みは揃わない。個人や企業・産業界の利害の複雑なからまり合いがあり、地域の利害も国内の複雑な利害の対立を内包しながらの諸国間の利益

の調整は、大変である。地球環境の改善は大切でも、人間の尊厳にふさわしい最低生活が国民に保障された物的福祉を表現しようとする、開発途上国の正当な権利も尊重されねばならない。経済成長と地球環境保護との両立を図らねばならないから、難しい。

地球温暖化の問題と取り組み始めてから約二十年余りだが、さまざまの努力にもかかわらず、世界全体では「温室効果ガス」の排出量の増加傾向は衰えていない。

カトリック信者の責任

地球温暖化は世俗の問題であり、教会が直接的に介入すべき事柄ではない。現世の人類の課題として全国家が連帯で最高責任を負い、個人、家庭、地域、地方自治体、またNGOなどが協力して取り組むべき問題である。特に企業・産業界の責任は重い。

だが同時に、われわれは地球温暖化がカトリックの信仰と無関係な問題ではないことも忘れてはならない。われわれの信仰は、自然界が神に創造され、その管理は人間に委ねられている(創世記1・26〜29)

と教える。人間には、地球の永続的な調和のとれた発展への責任がある。地球温暖化とは、結局、人間が物質的快適さと豊かさの享受を指して食欲に経済発展を追い求めた結果、地球上の生命の存在を脅かすことになってしまっている、ということの意味する。

地球温暖化は直接的には二十世紀の人類が経済発展の副産物として引き起こしたもので、という専門家たちの指摘を、日本のカトリック信者は厳しい反省を求める神の声として聴かねばならない。

近代化・工業化・都市化という時代の流れに適応しながら生き、生活の快適さを追い求め、経済発展に熱中し、その成果を享受している間に、いつの間にか「地球温暖化」を引き起こしてしまったのが二十世紀の人類であるといわれるとき、この世紀を先進国の一員として生きた者として、カトリック信者は良心のうずきを感じずにはおれない。地球温暖化の重大な要因とされている自動車にわれわれの生活が特別の反省もなくどれほど深く依存しているか、を考えただけでも心苦しい。主イエスの派遣を受けて(マタイ5・13〜16)現世に生きている

はずの教会は、結局、社会の中に自己を埋没させてしまい、預言者的機能を果たせなかったのである。

今からどう生きるか?

効果的な地球温暖化防止が可能なことも分かってきた。希望はある。困難にひるまず問題と取り組もうとする、世界の自覚も連帯も高まりつつある。この輪の中に入り積極的に問題と取り組んでいくことが、まず重要であろう。家庭で、職場で、地域で、またNGOにおいて、この問題に強い関心を抱き熱心に取り組むことによって、カトリック信者は自己の責任にふさわしく行動したことになる。

第二に、地球温暖化のしわ寄せが特に開発途上国の人たちの生存を脅かしている、という事実注目することである。カトリック信者は、特に環境難民の経済支援に積極的に関わることによって、地球温暖化への自己の罪を少しでも償わせてもらおうとするのである。





よき知らせ：愛である神様



17年間の銀行勤めを経て私が第二の職に就いたのは、3年前のちょうど今ごろでした。銀行ではさまざまな苦みを体験してきましたが、何とか乗り越えられてきたものです。でも、特に辞めるまでの2年余りは、私にとっては新しい、でもはっきりとしない何かを生み出すまでの、苦しみの時期だったと思います。

銀行はとても厳しい時期にあり、突然の合併の発表に、我が家の経済的なことや、将来への不安、精神的な悩みなどから、やがて体に変調をきたす結果となりました。それで、何度となく仕事を辞めたいことを家族に打ち明けました。

ある日妻が、聖体訪問から帰ってきたとき、「私は、私を愛する者に私を現す」というみ言葉が祈りの途中に心に響いたことを話してくれました。そのとき、自分が忘れていたことを思い出させられたように感じました。自分の苦しみに執着し、神や隣人を愛することを忘れていたからです。

それからまた、毎日その言葉に心を留め、回りりの人を愛するように努力し始めました。すると、次第に自分の中にあつた苦しみが消えていくのを感じました。

しかし、環境はさらに悪化して行きました。合併先からの締め付け、摩擦、リストラ等の問題で、肉体的、精神的な疲れから、愛することも、愛されることさえも拒みたくなるほどで、これまでの信仰生活さえ捨てたくなるほどでした。まるで神様からも見放されたように感じ、「なぜ」という、あの十字架上のイエスの叫びにも似た言葉が、何度も心の中で湧き上がってきました。

このように苦しんでいる時、私を支え理解してくれたのは、家族でした。彼らは私の状態をありのまま受け入れてくれ、いつも苦しみを分かち合い、これまでにない心のつながりを感じることができました。家族という大きな贈り物を与えられたことは、聖パウロが言うように、「私たちはすでに恵みの下に

生きている」ということなのでしょう。

その後銀行を後にし、新しい冒険が始まりました。しかし、それからというもの、仕事を見つけることが私の日課となりましたが、このような時期にあつて、仕事を探すのはとても難しいことだと分かっていました。しかし、一つの言葉が私の心に浮かんでいました。「神にはできないことはない」という言葉です。そして、「今は、謙虚に主がなさろうとすることを待つばかりです」と言えるように、毎瞬間を生きるよう努力しました。

この時期の就職活動は困難でした。しかし、十字架の上で見捨てられたイエスの姿を思い起こしながら、彼だけを愛そうと思い、毎瞬間の行いを彼にささげ、自分の隣人である家族や与えられた隣人を愛するようにはしていました。

事態は思わぬ展開へと移っていきました。3月に入り、知り合いの神父様を通じて、カトリックの大学を紹介していただくことになり、すぐに履歴書を持っていきました。でも、すぐには雇うことができないという返事でした。そして、3月25日、その日は私にとって忘れられない日となりました。神のお告げの祝日に仕事が決まったのは、私にとって大きな恵みであり、神様の愛を感じずにはいられませんでした。

それから3年間、私は、大学の創立者が残された一つの標語を心に留めて、日々生きようと努力しています。「マリアさま、いやなことはわたしが喜んで」という言葉です。この言葉には、マリア様が歩まれた道そのものが表現されているかのようです。マリア様の生涯は、決して楽なものではありませんでした。しかし、神様への従順を生きぬかれた方です。私も、マリア様への単なる信心に終わるのではなく、この言葉を日々生きることにより、もう一人のマリアとなれるように生きていきたいと望んでいます。それが、愛である神様への恩返しなのかもしれません。

(里川 誠一郎)



一年間に寄せられた

読者からの反応

「言の波」の発刊より一年が経った。

長崎教区本部からの発信紙として船出した本紙は、大海原を目ざして艦をこぎしながら、いまだに湾内をただよっている感じでもある。しかし、湾内をただよっているせいか、陸地からの声が届くこともある。「地区集会で利用しているが、集会が活気づいてきた」などの褒めこぼめいたものが聞こえやすいのかもしれないが……。

そこで、この一年間に編集部宛に寄せられたご意見のいくつかをご紹介します。これからも読者の皆さまの声に耳を傾けながら編集作業に当たっていきたい、との決意をお伝えする機会にさせていただきます。

*いつも「言の波」をご惠送賜りまして、ありがとうございます。今回は殊に圧巻です。コピーをして思いましたが、この雰囲気もそのまま伝えたいのです。もしよろしければ、2部送っていただけませんか？

*わたしの小教区では、自主性を育てるという意図もあって、印刷物は聖堂の入り口のテーブルの上に置いておくことにしています。ところが、

この「言の波」を手にとってくれる人はほとんどいません。

長崎教区にはそぐわないこの種のもの、経費がもつたいたないので、発行をやめるか、部数を数分の一に減らすかしたほうがいいのではないのでしょうか。

*「要理教師の友」誌を引き継ぐ長崎教区ならではの機関紙として、次号が出るのを楽しみにしています。少し硬いものですが、読み込んでゆく楽しさも味わっています。

*いつも楽しみに、始めから終わりまでたのしく読ませていただいています。特に「小共同体づくり」について。

でも、いま私たちがしていることは、自分の心に響いたことではなく、みこはを聞いて、思い出す自分の体験について分かち合っているだけ、という感じです。

*新しい意気込みが感じとれる冊子です。そして、述べられていることは現代社会で信徒が直面している大切なことです。

社会人としてのキリスト者は、聖職者と一般人の狭間で泳いでいる状態です。社会人としての信者に不足しがちな学問的要素を、誌上のオープン・カレッジ的に出されることは良いことだと思えます。今後を期待しています。

*現代の教会の諸問題への長崎教区の取り組みは、

他県へも発信している大切なことだと考え、興味深く読ませていただいています。

「水平線」の小話も生きていますネ！ いろいろなことを長崎から学ばせていただきたいので、これからもお送りくださいますようお願い致します。

*「言の波」という紙名は、すばらしいと思います。私たちは、このような「言の波」を良く学んだ上で、互いに、また一般の人たちとともに、生活の中で交わすべき「言の波」になるべきだと思います。だから、私たち自身がこれをさらに噛み砕いて具体化する必要があります。つまり、知識だけではなく、対話ができる「言の波」にならなければならない、と考えています。

以上、感想文の代表的なものを紹介させていただきます。

ある主任司祭から寄せられた「発行し続けることへの疑問」と似たような声も、いくつか耳にしたことがあります。全教区信徒へ届けられるのは「よきおとずれ」紙一つで十分だ、という意見があることも知っています。

編集スタッフは、発刊部数を減らす道を検討したこともあります。しかし、けっきょくは次のような結論に至りました。

「言の波」は、おかずだ。肉、魚、野菜、デザートまでが付いた、栄養たっぷりのおかずだ。口にし、味わっているうちに、血となり、肉となってくるものだ。